ろくおん
通信

２０２１年２月１日発行

発　行　日本ライトハウス情報文化センター
録音製作係
発行責任者　竹下　亘
電　話　06-6441-1017
ＦＡＸ　06-6441-1027
http://www.iccb.jp/

No.243

今号の内容

◎聴いてわかる録音図書をつくるために（第５６回）……１ページ
校正について　～雑音について～
◎もっと知ろう！「ウェブスタジオ・なにわ」（第３０回）……２ページ
「ウェブスタジオ・なにわ」で入力できること・できないこと　その２
◎わかる 使える 広がる！ デイジー図書徹底解説（第２９回）……３ページ
デイジー図書完成までの手順：デイジー校正の手順

聴いてわかる録音図書をつくるために（第56回）

校正について　～雑音について～

録音製作係　木田陽子

No.236 よりこのコーナーで「録音図書の校正作業」というテーマを扱ってきましたが、最後まで残していた話題があります。「雑音」です。個人の感じ方や再生する環境による違いが大きいことが、雑音の指摘を難しくしている理由かと思われます。

雑音にも様々な種類があります。音訳者自身が出す音（ページをめくる音、マイクに原稿が当たる音、キーボードを押す音、口中音、吹き音、息継ぎ、お腹の鳴る音など)、パソコンや周辺機器から出る音（原因としては、マイクケーブルの置き方、機器同士の接触が悪い、冷却ファンが過剰に回る、など)、部屋の外からの音（イヌ・ネコ・カラスの鳴き声、梅雨にはカエル、夏はセミ、あるいは工事現場、車、電車、飛行機の音）などです。録音用ソフトウェアの設定ミスの場合もありますし、パソコンの内蔵マイクが雑音を拾ってしまったこともありました（No.228 の「館からのお知らせ」参照)。

雑音は聞こえ方・感じ方に個人差があり、同じ条件でも気になってしまう人と全く気にしない人とがいます。更に、耳の穴に入れるイヤホンや耳全体を覆うヘッドホンを使う方が、耳にくっつけるだけのヘッドホンよりも小さな音に気づきやすくなり、指摘箇所が増えていきます。

小さい音をたくさん見つけても、修正後の音声が前後の音量の揃わないものになってしまっては元も子もありません。最初から雑音のない音声を録音することは大前提ですが、「修正しすぎないこと」つまり「校正する際に指摘する箇所を吟味すること」もやはり必要になるのかもしれません。

校正で雑音を指摘する際は、「読書の邪魔をしているか」がポイントになるのではないかと考えます。たとえば吹き音（ポップノイズ）が大きく入っている場合は、利用者が不快に思う可能性が高いですので、修正依頼を出す校正者がほとんどでしょう。

こんな場合はどうでしょうか。校正用の音源を何十分か聞いてきて、「…だったのです。」と間が空いた瞬間、ブロロロロ…と、ヘッドホンの奥で車が通り過ぎて行くのがわかりました。大きそうだからトラックかな…と、こんな風に気をとられていると、読書を楽しめなくなってしまいそうです。これは修正してもらうことにしましょう。

反対に、音訳者の声に重なっている雑音があったとします。それが再生音量を大きくしてやっと聞き取れる程度の音なのであれば、指摘しないという選択もあります。ただし、同じような雑音が何度も入っているようであれば、校正票の備考欄または連絡票で音訳者にそのことをお伝えした方が良いでしょう。

一方音訳者も、指摘された音が自分では聞こえなかった場合は、イヤホン・ヘッドホンを替えてみるなどしてみてください。編集者に確認を依頼するのも一つの方法です。

もっと知ろう！「ウェブスタジオ・なにわ」（第３０回）

～ボランティアの皆さんから寄せられる質問などを、毎回少しずつ紹介しています～

「ウェブスタジオ・なにわ」関連の画面で入力できることを紹介します。前回の「下調べ票」と「音訳データの送信画面」に続いて、「ウェブ校正票」に入力できる内容（厳密にはRecdiaの「校正票追加画面」あるいは「校正票編集画面」）についてみていきます。

＊ウェブ校正票（＝「Recdia」の校正票追加画面）

時　　間：時間表示をダブルクリックする方が一般的ですが、手入力も可能です。
６桁までの数字と「:（半角コロン）」のみ入力可能。「1」と入力した場合は「00：00：01（1秒）」、「12345」と入力した場合は「1：23：45（1時間23分45秒）」と変換されます（入力できる最大の数は「99：59：59」）。

頁　　：５桁以下の半角数字。入力できるのは「0」～「99999」。「8,10」など複数のページを入力することはできません。

行　　：マイナスも含めた３桁以下の半角数字のみ。「-999」～「999」の範囲。複

数の行の入力は不可。
原 本 語 句：全角１９９文字まで。ある程度自由に入力可能。
音訳音声（ウェブ校正票では「録音の音声」）：（原本語句に同じ）
より良い読み（ウェブ校正票では「良いと思われる読み」）：（原本語句に同じ）
備　　考：全角で１０００文字以上入る。ある程度自由に入力可能。
音訳者修正：下向きのVを押し、「－（修正パス）」か「○（修正済み）」を選ぶ。
修 正 範 囲：（全角２００文字まで入力できますが、ウェブ校正票には表示されないため、情文では使用しないことにしています。）
編集者確認：下向きのVを押し、「○（修正確認）」か「×（要再修正）」を選ぶ。

…　…　…

★　漢字を含むホームページアドレスを下調べ票・ウェブ校正票に載せるときの注意点

No.239を参考に、指摘の根拠となるホームページアドレスをウェブ校正票に貼り付けて「送信」ボタンを押しても、エラーが出て送信することができなかったことがありました。

たとえば「Weblio（ウェブリオ）」で「音訳」という語句を検索した時、アドレスバーを見ると、アドレスは「https://www.weblio.jp/content/音訳」となっていますが、これを「メモ帳」や「Microsoft Word」などに貼り付けると「https://www.weblio.jp/content/%E9%9F%B3%E8%A8%B3」と、数字・アルファベットと記号（今回の例ではパーセント記号）の表記に変換されることがあります。つまり、文字化け状態です。

ウェブブラウザに貼り付ければ目的のページへきちんと飛べるのですが、ウェブスタジオのシステムではこの「文字化け」部分を読み取れず、エラーが出てしまいます

今回のように辞書サイトの場合は「ウェブリオ」と、名前だけを記入すればよいでしょう。もしほかに貼り付けられない事例が出てきましたら、係までご相談ください。

（今号の「デイジー図書徹底解説」コーナーの最後の記事も、合わせてご覧ください。）

わかる 使える 広がる！
デイジー図書徹底解説（第２９回）

このコーナーでは、デイジー校正（最終校正）について紹介しています。今回は校正の手順です。また、編集者・デイジー校正者ブラッシュアップコーナーでは、「原本凡例」について取り上げています。デイジー校正者、編集者のみならず、音訳者の方も今一度ご確認ください。

デイジー校正に取り掛かる前に……

1.　初めに、原本を見ないで聞いてみる

利用者の立場に立って聞くことができます。目次から本文の構成がわかるか？聞きやすい音量やスピードか？読み癖や間の取り方はどうか？ページ移動やグループ移動に不便はないか？など、原本を見てしまうと気付かなかったかもしれない発見があります。

2.　次に、原本にざっと目を通す

どのような内容、文体なのか？図・表・写真は本文においてどんな扱いになっているか？「　　」・(　　)は、どのような使われ方をしているか？注や引用文の書かれ方はどうか？などを把握しておくと、校正作業がスムーズに進みます。また、頻出する言葉や人名・地名、ルビの付いている語句、１冊の中で読みを統一した方がよいもの（「ニホン／ニッポン」など）があれば書きとめておきます。

3.　「原本凡例」、「はじめに」、「あとがき」、「原本奥付」は、熟読しておく

図書全体が把握できます。なお、「原本凡例」は、「凡例」・「本書の使い方」・「この本について」・「読者のみなさまへ」など、さまざまなタイトルで書かれています。本文の前にあるのが一般的ですが、巻末に書かれていることもあります。その図書全体に及ぶ内容なので注意が必要です。

デイジー校正の内容と手順

校正の手順は、図書の内容によって変わってきます。また、校正者によってやりやすい順番、慣れた順番があるかと思いますが、以下のような項目を漏れなく確認していきます。

1.　書誌情報
2.　「始めの枠アナ」・「終わりの枠アナ」……完成年は合っているか
3.　デイジー図書凡例……凡例通りのデイジー図書ができているか
4.　階層化（レベル化）……セクション移動の確認
5.　書名＋副書名のワンフレーズ化
6.　目次の項目のワンフレーズ化……見出し＋ページ
7.　本文中の項目（見出し）のワンフレーズ化……見出し＋ページ
8.　本文の読みや処理は適切か？
9.　ページ付け
10.　グループ付け
11.　マーク・コメントが残っていないか
12.　各セクションの最終フレーズが無音になっていないか

13. 「終わりの枠」の後に余分な録音が残っていないか
14. 「見出し入力」……正しく入力されているか
15. CD ケース用紙の記入間違いや記入漏れはないか

※ 当館では、校正終了後、「デイジー校正者のチェック表」で再度確認しています。

次回からは、「録音の順序」に沿って、デイジー校正のポイントを具体的にみていきます。

編集者・デイジー校正者ブラッシュアップコーナー

＊「原本凡例」について

「原本凡例」には、囲みの形で記載されているもの、「注」と書かれたものなど、一見して、「原本凡例」だとわからないものもあります。書かれている内容によっては、何らかの音訳処理が必要となり、注意を要します。以下のような凡例はどうでしょうか？

「原本凡例」の一例

1. 原文には濁点がないが、濁点を補った。
2. 旧仮名遣いは、新仮名遣いに改めた。
3. 旧字体は、新字体に改めた。
4. 句読点その他の記号を補った。
5. 送り仮名は、適宜補った。
6. 漢数字は、原則としてアラビア数字に改めた。
7. 商品名の後に一般名を「カッコ」・「(カッコ) トジ」で括って表記した。
8. 編者による解説を角括弧で囲って挿入した。
9. 筆者の考えは、太字で表記した。
10. 底本の割注は括弧内に小文字で表記した。

● １～６のような文字の表記に関するもの……多くの場合、原本の凡例に書かれている通り読みます。利用者も「原本にそのように書かれているのだな」と納得できます。ただし、本文中でその内容に触れている場合（そのことを話題にしている場合）は、何らかの説明が必要になってきます。

● ７～１０のような処理に関するもの……注意が必要です。以下は、処理、コメントの一例です。

【次ページに続く】

【前ページより】

・７の場合……２つのケース

① 本文中で、「カッコ」・「トジ」と読む箇所が全くない場合

「凡例」は原本通り読み、本文中の該当箇所は、カッコ・トジで括って読む。

② 本文中に、「カッコ」・「トジ」と読む箇所が他にある場合

「カッコ」・「トジ」と読むと区別がつかないので、別の読み方をすることになります。「この図書では、一般名〇〇　と読みます」など、本文中では別の音訳処理をしている旨のコメントが必要です。

・８～１０の場合

本文中に、「角括弧」・「角括弧トジ」や、「カギカッコ」・「トジ」と読む箇所が他にないかを確認します。

１０の場合では、「割注」・「割注おわり」などと読む方法もあります。この方法では、「この図書では、割注・割注おわりと読んでいます」のコメントを入れます。

● ポイント

・本文中で、同じ読み方の括り符号（カッコやカギカッコなど）がないかを確認。

・本文中で、「凡例」とは異なる読み方をする場合は、その旨をコメントする。

… … …

★　「半角記号」と「環境依存文字」を使わない理由について

前回の「編集者ブラッシュアップコーナー」で、デイジー編集中に見出しを入力する時に注意することとして「半角記号を使うとエラーが出るので使用しない」、「外字、旧字体、環境依存文字は使用しない」という解説がありました。

ウェブスタジオの下調べ票や、ウェブ校正票（＝Recdia の校正票）でも同じように使えない文字というのがありますので、まとめて説明します。

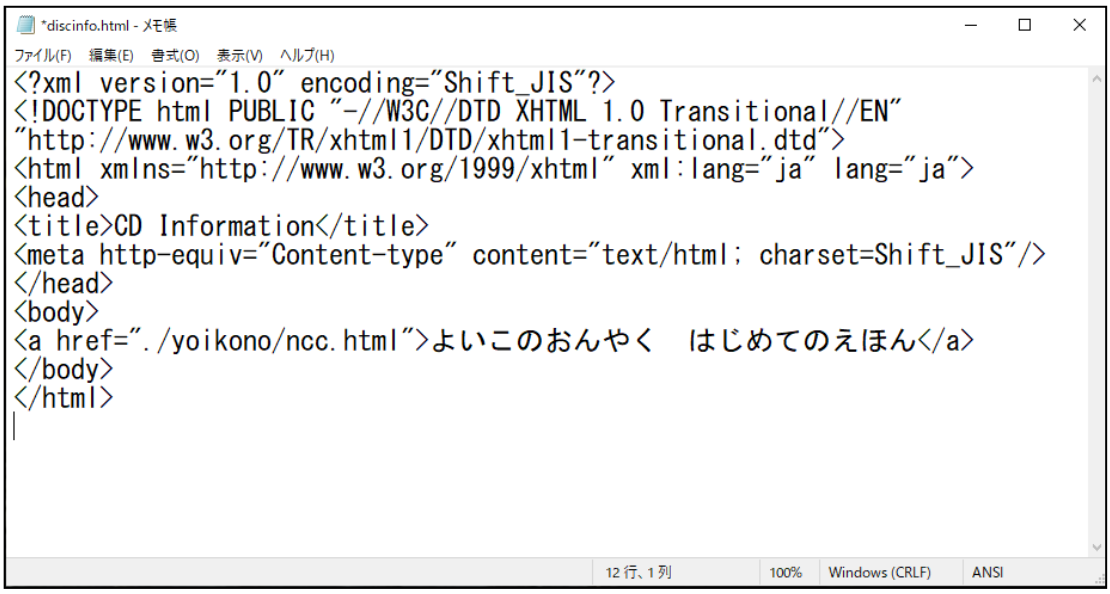
事例１：下調べ票に「１９６０年代」を表す略語「‘60」を全て半角で入力したところ、エラーが出て保存されなかった。(No.238 参照)

事例２：「Plextalk Recording Software Pro（以下 PRS Pro)」の書誌情報に、かな入力からは変換できない漢字があったので、手書き入力を使って記入した。後日、完成品を借りた利用者から「再生できない」という連絡があった。

＊　半角文字を使ってはいけない理由

乱暴に言ってしまうと、「デイジー再生機やパソコンなど、機械に動作の指示を出すために使う記号だから」、だと思います。

デイジーCD を製作する際に必要になるファイル「discinfo.html」を Windows の「メモ帳」アプリで開いてみると、以下のような内容が書かれています。



半角記号の例として挙がっていた「!」「=」「-」「“」のほか、「?」「:」「<」「>」などが含まれているのがわかります。詳しくは書きませんが、それぞれに役割があります。

画像の下から３行目「<a href」から始まっている部分の後半に第１セクションの見出し、つまり書名が表示されるのですが、ここにもし半角記号が混ざっていたとしたら、正しい命令が読み取れなくなってしまう可能性があります。

No.238 掲載の「下調べ票へのアポストロフィ（’）入力について」の例も同様の理由で、下調べ票に入力することができない仕組みになっているようです。

＊　環境依存文字を使ってはいけない理由

「大多数のパソコンで使用できる文字に含まれていないから」です。

記号に関しては、例えば No.234 に「ダブルクォーテーションマーク（「“」、「”」）の入力について」という記事を掲載いたしました（「PRS Pro」では形が判別しづらいので、「見出し抽出アドイン」「見出し抽出アプリ」で印刷したものなどをご確認ください）。

漢字の方は、大雑把に言うと「JIS 第２水準までの漢字」以外が「環境依存文字」と呼ばれるようです。「JIS 第３水準」、「JIS 第４水準」、第１から第４までのどれにも含まれない漢字、特定のパソコンだけで使用できるように作成した外字などが出てきた場合は、どのパソコンでも表示できる第１・第２水準の漢字に置き換えることになっています。事例２では、読みとれない文字があったために、再生自体が出来なくなっていました。

「森鷗外」（旧字体表記）が「森鴎外」になってしまう話は有名かもしれません（「鷗」は第３水準の字）。「内田百閒」（「閒」はJIS漢字ではない）は、異体字である第１水準の「百間」にするか、かな書きの「百けん」にするか、迷うところです。人名でよく使う「﨑」「髙」「濵」「吉」は、「崎」「高」「浜／濱」「吉」に置き換えることになります。

実は、旧字体がすべて使えないというわけではありません。「會」「舊」「惠」「藝」「實」「圖」「續」「澤」「寶」など第２水準に含まれている字については使用可能です。ということで「寫眞」「醫學」などは、原本通りの表記で書き込めることになります。

漢和辞典によっては、JIS漢字水準の情報が掲載されている場合もあります。インターネットでは「漢和辞典ONLINE」（https://kanji.jitenon.jp/）などで検索できるようです。

館からのお知らせ

★　Recdiaでの録音時間を１ファイル（１枚分）４５分に変更します

最近、Recdiaで６０分前後録音した後、そのファイルがRecdiaの画面から消えてしまうという現象がみられました。ファイルの大きさが一定量を超えると名前（ファイルの種類を表す拡張子）が変わってしまうために、音声データだと判断できなくなるのが原因のようです（拡張子を「.wav」に戻せば、音声データとして使える例が大半ですが）。

開発元のホームページを見てみると、「録音した音声を修正する際の処理時間等を考慮しますと、弊社では１ファイル当たり最大４５分程度で運用して頂くことをお勧めしております。」（https://www.recdia.y-net.co.jp/modules/d3forum/index.php?post_id=1038）と書かれていました。ですので、一旦「４５分まで」にして、様子をみたいと思います。

・最初に録音する時は４５分まで。

・修正録音した際に、長さが４５分を超えても構わない（できれば６０分以内にする）。

★　休室のお知らせ

２月１１日（木）：建国記念の日

２月２３日（火）：天皇誕生日